

こることも、すぐに世界中に影響を及ぼす昨今であるが、平和が世界中から消えることのないように、心から祈念して筆を置く。

## アカシアそして百日紅<sup>サルスベリ</sup>

群馬県 初谷 三衣子

### 一 大連生まれ

私は兄二人、姉二人の末っ子として昭和十(一九三五)年大連で生まれ、終戦まで大連で育ち、戦後の一年を吉林で過ごした。大連時代は恵まれた環境で過ごしたが、あの玉音放送が終わって敗戦が決まった瞬間から、逆の厳しい環境に置かれることになった。その上、私は引揚者として多くの困難な事態を経験した。そんな経験を経て、小事にこだわらず、多少のことではくじけない性格になった。日本に帰ってから、満州のことや引揚げの話になると「やっぱり大陸育ちなものね……」と言われることが多い。良くも悪くも自分

流に過ごして六十余年、自分なりに納得している性格である。

戦後五十五年を経て、当時とあまりにも違ってきた最近の社会情勢を見聞きして、戦争の悲惨さや、戦後の苦難から立ち直るまでのいきさつなどを後世に伝えることができるのは、それを体験した私たちしかないのだから、正しく伝える責任があることを痛感している。今回、機会があって当時のことを書きつづることができるので、過去の出来事を振り返るだけではなく、若い方々に正しく理解していただけるように念じながら筆を執っている。

### 二 満州へ、満鉄へ

昭和八年、父は広大な満州大陸に魅力を感じたのであろう、満州で思いきり仕事をしたと東京の国鉄を退職し、母と幼い子供たちを連れて満州に渡った。父は、自分が決意して選んだ道であったから張り切っていたが、母は未知の世界である満州での生活に不安を覚えたに違いない。しかし、いざ満州での生活を始めてみると、東京の国鉄にいたときに比べて随分恵まれ

ていることが実感され、すっかり落ち着いてきた。満州の冬の寒さは格別で、外に出ればすべてが凍り付くほどであったが、部屋の大きなベチカには石炭が赤々と燃えて暖かかった。しかも石炭は物置に豊富に蓄えられていて、みんなの心はいつも豊かであった。杜宅には電話も引かれていた。

冬、凍りついた道路では、馬車を引く馬が滑って転ぶようなこともあったが、兄たちはその広い道路でスケートを楽しんだ。厳しい冬が終わるとうららかな春がやってくる。待ちかねていたように花々が咲き出す。ライラックが薄紫の花をたくさん付けて芳香を流し、そしてアカシアの並木も甘い香りを漂わせる。母が揚げてくれた、アカシアの天ぷらのバリバリした歯触りも忘れられない。私たち子供は花の房を並べてままごと遊びをしたり、瓶に詰めて棒でつぶし、化粧水を作ったりして楽しんだ。今でも、大連を思い出すとアカシアの花が頭に浮かぶ。アカシアの大連である。

### 三 開戦の日

末っ子の私は、甘やかされて育ったせいか体が丈夫

でなく、風邪を引いたり、扁桃腺へんとうせんをはらしたり、喘息ぜんそくの発作が起きたりしてよく寝込んでいた。小学校に行くようになってからも相変わらず病弱で、両親はこんな状態では入学は無理だろうと話し合っていたが、私は学校に行くのが楽しみで、姉のランドセルを背負って家中を走り回っていた。そんな様子を見て、両親は小学校の養護学級に入れてもらうように学校側と話し合い、兄や姉が通っていた下藤国民学校に入学できた。養護学級は、普通の学級と違って勉強よりも健康が第一で、午後は立派な藤棚の下でお昼寝の時間があり、毎日甘い肝油のおやつがついたので、普通学級生にとっては羨望的であったらしい。今でもクラス会に集まると、普通学級の人たちから口々に「うらやましかった」といわれる。

昭和十六年十二月八日の午後、静かな大連の街に、米・英との開戦を告げるサイレンが鳴り響いた。「戦争が始まったのよ」と母が呼び戻しにきた。父は単身赴任していて、留守宅を一人で守っていた母の不安はどんなであったろうかと今にして思うのである。この

日から、先の見えない戦いが始まり、多くの命がうばわれ、多くの街が焼け野原となったのだ。当時、正午のサイレンに合わせて日本のある東の方へ手をあわせて拜むことになっていて、私たちはどんなに遊びに夢中になっても、サイレンが鳴ると決まって遊びを止めて拜んだ。

#### 四 大連から吉林へ

昭和二十年四月、父の単身赴任は終わり、一家は住み慣れた大連をあとに北滿の吉林に移転した。初めて乗ったアジア号の車窓から見た松花江シヨウカコウの大きな流れと、その先に広がる広大な土地、そして大平原の地平線に沈む燃えるような夕日が、ものすごく大きく見えたのが印象的であった。

兄たちは、上の学校で勉学のためにすでに家を離れていた。長姉は女学校、次姉は六年生で、私は四年生であった。吉林の満鉄社宅は一戸建てで、部屋数も大連の社宅より多く、ガラス張りのサンルームは私のお気に入りの部屋であった。とくに床板をめくると畳一帖ほどの地下室があり、かくれんぼをして遊ぶのには

格好の場所です。私には特別な魅力があった。また庭は芝生で、周りにはいろんな種類の木がたくさん植えられていた。子供が遊ぶには十分な広さであったので、大連の友達と別れてきた寂しさを忘れるのに時間はかからなかった。

父のいる家庭は何となく温かかった。中国人との交流もありにぎやかだった。畑作りもした。徒歩でどのくらいだったろうか、鍬くわやバケツを提げて父と通ったのを思い出す。私たちは大連と同様、恵まれた環境の中で楽しい日々の生活を満喫していた。

一方その頃、すでに日本の戦況は悪化しており、東京が大空襲をうけるなど悲惨な状況であったようだが、私たち子供には分からず、戦争の怖さを実感することもなく日が過ぎていった。

八月九日、真夏の空に飛行機が飛んできた、と思うまもなく鳥の大群がばらまかれたように見えた。鳥はゆっくり舞い降りてきて、やがてキラキラ光っていたが、近くなってみると鳥のように見えたのは大きな紙であることが分かり、じっと見上げていた大人や子供

たちの手元に、ヒラヒラと舞い降りてきた。拾い集めてみると、ソ連が日本に「宣戦布告」したぞと知らせるビラであった。私などはビラの意味がよく分からな  
いまま、大人たちの異様な雰囲気  
に恐れを感じて、家に飛び込み母に抱きついてた。

宣戦布告とはいうもののソ連の攻撃はなく、たまにソ連機が飛んできて照明弾を投下していくだけであった。それでも警戒警報が鳴るたびに、電灯に黒い布をかぶせて光が外に漏れないようにし、空襲警報が鳴ると同時にいつもの訓練通りに防空壕に待避して、警報が解除されるのを待っていた。それなりの緊張した時間を過ごしたのだが、内地の空襲騒ぎとは比較にならない落ち着いた暮らしが続き、戦争の本当の怖さを知らないうちに終戦の日を迎えた。

##### 五 終戦、「幸福」と「降伏」

戦時中、小学校ではいろいろな野菜や、ひまし油を採るためのひまなどを栽培していた。あの日も野菜などの手入れのために登校したが、先生から「今日は重大な放送があるから早めに終わりにする」と言われ、

帰宅した。両親は二人の姉と私に正座をするようにと言  
い、みんな緊張してラジオに聞き入った。十五日正午に始まった天皇陛下の玉音による終戦詔勅放送が流れたのである。電波の状況が悪いために、天皇陛下が何を言われているのか分からず、私は両親の様子を上目遣いにうかがっていたように思う。玉音放送の日、放送の内容が分からなかった私がたった一語「無条件降伏」だけが理解できたと思っていた。小学校四年生の能力である。「降伏」を「幸福」と勘違いして理解したのである。

両親が泣き崩れる姿にとまどって、「幸福なのになぜ泣くの」と聞いてその答えを聞くまもなく、社宅を取り囲んでいた中国人たちが私たちに向かって石を投げ始めた。あとで聞いたところでは、正午前から気配を察したのであろう、手に手に石を持った中国人が社宅を取り囲み始めていたということだ。長い間日本軍、日本人に支配されていた中国人の気持ちや思うところ、手のひらを返したような行為もうなずけるような気がした。

## 六 悪魔の合唱

雨のように飛んでくる小石を避けて、窓の下に身を隠した。中国人の投石は暴動にまで発展せず終つたが、それを待っていたようにソ連兵の略奪が始まった。ソ連兵たちは手首から肩まで腕時計をはめ、ポケットにはもう入らないというくらいに万年筆をねじこんでいた。それでも「ダワイ、ダワイ！（よこせ）」を繰り返して、「ニエット（無い）」と答えると女性はいないか、日本兵は隠れていないかと探し回る始末であつた。挙げ句の果てに、家財道具を外へ運び出し、トラックに積んで夜の道をどこかへ運んで行ってしまふ。トラックのソ連兵たちは、いつも歌を歌っていた。近づいてくる歌声、遠ざかっていく歌声、さながら悪魔の合唱であつた。ソ連兵は銃床で扉を壊し土足のままなだれ込んでくる。彼らの略奪は繰り返された。気丈な母は私たちを裏庭に逃がし、一人でソ連兵たちに立ち向かつた。深い雪の夜庭へ逃げ隠れるのは怖かつたが、それ以上に母の身が心配であつた。悪魔の合唱が遠のくのを待って家に飛び込み、母子は抱き

合つて泣くばかりであつた。

母は、戦地から逃れてきた二人の日本兵をかくまっていた。ソ連兵がくるたびにサンルームの地下室に二人を押し込み、もとのように蓋をして椅子を置き、私たち姉妹が何気ない顔で座っていなければならなかつた。数カ月前までは私たちの楽しい遊び場所だつた場所は、文字通り隠れ家となつた。「どうぞ兵隊さんが見つかりませんように」と祈る心の奥底に、この二人が早く出て行けばよいのにと願う気持ちもあつたのを、後ろめたく思い出す。二人がいつどのようにして我が家を出て行ったのか記憶はないが、無事帰国されていることを信じた。

思い出せばこんなこともあつた。多分終戦直後であつたと思うが、当時鉄道病院勤務だつた父は、ソ連軍から薬品の調達を命じられ、病院に向かつた。薬品をそろえ指示された場所に届けたとき、ソ連軍は既に撤収していて、父はそのまま自宅に帰つてきた。あとで思えば父は運が良かった。もし、もう少し早くソ連軍に届けていたら、きっとソ連軍に拘束され抑留の身

になっていたであろう。二人の日本兵の無事帰国を信じたい気持ちは、この父の運の良さに比べて二人のことが心配であったからであろうと思う。

#### 七 危うく中国残留孤児に

社宅での生活も限界にきていた。市街地で他の家族と共同生活を始めるため、不要になった家財道具を、父が親しくしていた中国人のSさんの家に運んだ。父について何回か訪ねたとき、Sさんは「末の娘さんを預かりましょう」と繰り返し言うようになった。私は、その度父の後ろに隠れるようにしていた。いつも父が話し合うSさんの家の土間は薄暗く湿っぽく、土間に放された鶏の動きや糞のにおいがうっとうしく思ひ出される。私はいつも泣き出したい思いで、父の話が終わるのを待っていた。しかし、「いや、大丈夫です。この子は日本に連れて帰りますから」と父がきっぱり断ってくれた。ひょっとしたら、Sさんの所に残されるかもしれないという極度の緊張で、家に帰り着くまでの情景を何ひとつ覚えていない。父のきっぱりした言葉を聞いて、これで私は皆と一緒にいられてよ

かったという結果だけが記憶に残っている。

今、中国残留孤児たちの肉親探しをテレビで見るとびに心が痛む。孤児たちが養父母から聞かされていた肉親とのつながりや、肉親が残した証拠の品を肌身離さずに持って、真剣に肉親を探す様子は、私がSさんの土間での暗い思い出と重なって、切なさが胸に迫ってくる。もっと早く日中国交が成立していれば、多くの人が肉親と出会う感動を味わったであろうにと、いまだに肉親と巡り会えない人々の無念ともどかしさが思われる。

#### 八 市街地での暮らし

この建物もどこかの社宅だったのでだろうか。階段を挟んで左右に住居があり、外部からの侵入を防ぐため、階段の入り口に扉が付いていた。残り少ない衣類は万一のときのために残しておかなければならない。一家五人は狭い部屋で支え合い、現金を得るためにそのころはやっていた手巻きタバコや菓子をこしらえて、それを売ること細々とその日その日を暮らしていた。だれが言い出したのか終戦と同時に、昭和は終

わって年号は「大新」になると噂が立ち、手巻きのたばこに大新と名付けて売った。五年生の私は、そのたばこ大新を小さな板きれにのせて並べ、真冬の街頭に立って売った。吉林の冬の寒さは厳しく、手袋の上に綿の入ったミトンをつけても、指の感覚はすぐになくなった。大きなマスクから漏れる息はまつげをバリバリに凍らせ、痛くて泣くと涙がまた凍った。街頭での客はほとんど中国人とソ連兵で、買い手より売り子の方が多く、私のたばこはなかなか売れなかった。値引きをして売ることなど知らなかった私は値切られれば売らず、売れないまま厳しい寒さの街頭に立ちつくしていた。饅頭屋から、温かい饅頭を仕入れて売ったこともあった。だがやはり饅頭も売れない。売れない饅頭を持ってあまし、湯気で曇っている饅頭屋のガラス窓をじっと見つめていた。ちょうどマッチ売りの少女がぬくもりを求めたように、私もこの饅頭が売ればあの暖かい部屋に入れるのだと思いつながら立っていた。

女学生だった姉は、避難してきた満蒙開拓団の私たちの世話をするために出掛けた。食事を作って配った

り、病人の世話や怪我した人たちの傷の手当てもした。開拓団の避難所で世話をしているときに、姉は発疹チフスにかかった。医者はいないので何の手当もできず、母は高熱にうなざれている姉の体を、熱湯につけたタオルを絞って拭いた。母の手のひらが真っ赤になって、手の皮がむけても拭き続けた。姉はうわごとで、パイナップルが食べたいと繰り返していた。父はじっとしておれず、真冬の街に出掛けた。戦後の混乱の中、街にパイナップルなどあるはずがない。どのくらい経つたろうか、父はパイナップルの缶詰を手にして帰って来た。父がどこで手に入れたのか、姉が喜んで食べたのか、やはり記憶はここでとぎれていく。父が無事に帰宅したと、姉の希望が叶えられて安心したことだけが記憶にある。

## 九 満州の宝

翌昭和二十一年の春だったろうか。朝日小学校講堂での避難生活が始まった。一家族、畳五枚での暮らしに、プライバシーなどなかったが、子供たちは講堂だけでなく教室巡りをしたりして、遊んで過ごしたこの

二、三カ月が、唯一楽しい思い出として残っている。

引揚げ命令が出されたのは突然だったように記憶している。リュックサックは一人一個に規制され、母は丈夫な布でリュックサックを作った。当然、持って帰れる品物には制限があつて、写真は景色の部分をおつとすること、貴金属の持ち帰りは禁止などいろいろな言い渡された。班単位での行動だから、もし誰かが違反をすれば班全体が帰れなくなる。それでも帰国してからの生活を考へて、禁制品でも何とか持ち帰ろうとみんなが知恵を絞った。母は隠れるようにして、リュックサックのたすきに指輪を縫い込んだ。敗戦の結果、引揚者たちはソ連兵や中国人の略奪、度重なる移転、そして避難所での共同生活の末、何一つ財産と呼べるほどの物を持たなくなった。父は、「財産はリュックサック一つになつてしまつたが、お前たち二人は満州の宝だ」と言つて、満州生まれの次姉と私に久々の笑顔を見せた。あの笑顔は父の実感であり、また母に対する慰めだったのであらうと思つている。

広大な土地、大きな夢を持つて満州に渡り若い情熱

をかけて働いた誰もが、志半ばで味わつた挫折や絶望、その無念さをこらへて、笑顔を作つて気を奮立たせたのであらう。

こうして、皆それぞれのリュックサックに、日本の暮らしに欠かせない物や、満州での思い出を詰め込んで出発の日を待った。まだ見ぬ日本という国を思い「満州の宝」の胸は大きく膨らんでいた。

#### 十 引揚げ開始

終戦から一年目の昭和二十一年八月十五日、吉林から奉天（瀋陽）、錦州を経て港のある葫蘆島ホロトまでの長い旅が始まつた。引揚列車は材木などを運ぶ無蓋舎で、囲いもなかった。幾本かの杭を立て紐を巻き付け、リュックサックで固定し、子供たちが振り落とされれないように真ん中に座らされた。みんな膝を抱えて、やっと座れるくらいのスペースしかなかった。途中、列車は何回か止められ、その度にながしか品物を渡して動き出すということを繰り返した。引揚列車と見ると、匪賊たちが列車を止めたのだ。また、引揚列車は満州大陸を流れる大河の上で何回となく停められ

た。これは、金品を強要する匪賊のためでなく、空腹と栄養失調で亡くなった乳児たちを大河に葬るために繰り返される、悲しい停車だった。葬られた乳児の魂は大河を流れ、大海に出て日本に帰り着くことができるのであろうか。私たち子供も、怖い物見たさで窓から身を乗り出して川面をのぞき込み、大人たちのまねをして両手を合わせた。現在、自ら命を絶ったり、また他人の命を奪ったりする荒唐した社会の出来事を見聞きするたびに、あのとときの光景を思い出し命の尊さを伝えなければと思う。

#### 十一 葫蘆島に着いて

葫蘆島で私たちは数日、船便を待つことになった。やっと船が入港して乗船することになったものの、宿舎から港までの道のりは遠く、しかも道路は真夏の太陽に照らされて、何の潤いもなく白く光っていた。船に行き着けるのかと不安に思いながら、引揚者は船に向かつて黙々と歩いた。心臓に持病を持っていた母は、リュックサックの背負い紐が肩に食い込んで、腕全体が赤く晴れ上がっていたが、必死になって耐えて

いた。

港に停泊していたアメリカの貨物船は大きかった。アメリカ兵と日本人船員が手を貸してくれた。アメリカ兵は笑顔で迎えてくれたが、なじめなかった。しかし、ここにはもう中国人もソ連兵もいないと思ったときの安堵感は今でも忘れない。

貨物船の船倉は蒸し暑く、人々は甲板に出て開放感を満喫していた。スピーカーからは、日本で流行しているという「リンゴの歌」が繰り返し流れていた。

「赤いリンゴに唇寄せて……」私たちが子供は明るい歌のメロディをすぐ覚えたが、私が口ずさむと母は嫌がった。母は、戦争中の恵まれた生活が終戦後危害と屈辱に満ちた生活に一転して、苦勞の連続だったのに、引揚船での平穏な空気がまだ信じられず、違和感があったのであろう。あまりの格差に、気持ちの整理がつかなかったのかも知れない。こうして大人たちは複雑な気持ちを整理しきれないまま、船の揺れにただ身を任せていた。母はそんな状態であったが、私は子供心にも安堵を覚えるほど平穏な毎日であった。

平穩な船旅の中でも悲しいことがあった。祖国日本を目の前にして亡くなった人を水葬するために、船尾へ大勢の人が集まった。中には小さな花束を持っている人もいた。満州大陸の大河に流された小さな命、そして祖国を目の前に、小さな花束と共に日本海に葬られた方々やご家族の無念は察するにあまりがある。

## 十二 佐世保から上野へ

船は玄界灘の荒波にもまれながらも、日本に近づいていた。そして九月初め佐世保に入港した。甲板に飛び出した人々は、祖国日本の緑を見つめて涙ぐんでいた。やっと懐かしく美しい日本に帰ったという感激と、満州建国という華々しさと、終戦から現在までの数々の困苦を考えると、祖国日本に裏切られたという思いがつのり、戦時中、中国人の人々に加えた圧迫などへの反省が重なって、私たちは言葉もなく立ちすくんでいた。

佐世保には一週間くらいいたのだろうか。数種類の予防接種を受け、DDTを頭からつま先まで真っ白になるほどかけられた。当時は健康手帳もなく、接種が

一つ終わるたびに腕に「済」のゴム印を押された。入浴もままならない引揚者だから、この済のゴム印は何日も残っていた。親せきや身寄りの消息が分かった人たちは、行き先地域ごとにまとまって移動することになった。私たちは、東京に祖父がいることが分かり、戦災にあっていなければ両親が建てた家もあるはずであった。かすかな望みをもって東京に向かうことになった。引揚者用の列車に、リュックサック一つを持って乗った。列車はたちまち満員になったが、途中の駅に停車するたびに、窓からも乗り込んでくる人などがいて、車内は身動きもできなくなった。

私たちの東京での宿舎は上野の寛永寺で、寺の本堂に案内された。広くて天井の高い本堂はひんやりとしていて心地よく、疲れた足裏に畳の感触は何ともいえず心地よかった。先に寝ていた男の人が「うるせえなあ」と言って布団を頭までかぶった。私たちは驚いてそそくさと荷物をまとめ、久々の畳に疲れた身を投げ出した。誰もがぼろ布を放り出したようになって、深い深い眠りに落ちた。

翌朝目覚めた私たちは、母と次姉のリュックサックが無くなって、に気が付いた。大事に懸命に背負ってきた、たった一つの財産なのに、何ということだろう。前夜「うるせえなあ」とつぶやいた男の仕業だった。戦後の混乱期で警察も手が足りないため、捜査も思うように行かず、結局は泣き寝入りで、運が悪かったと諦めるしかなかった。母のリュックサックの入すきに縫い込んだ指輪も、姉のリュックサックに入れておいた着物や帯もなくなってしまった。

### 十三 百日紅

盗難事件に、いつまでもよくよしているわけにはゆかない。父は、祖父を捜しに日町に向かった。帰って来た父から、幸い戦災にも遭わず祖父は健在との知らせは、盗難事件でしょげ返っていた私たちに、この上ない朗報であった。さらに、両親が知人に管理を頼んでいたN町の家も、焼けずに残っていると知らせを信じられない思いで聞いた。狭くても、雨露を凌ぐことのできる家があることは最高の幸せであった。

寛永寺に一週間ほどお世話になって、いよいよ一家

五人はN町の家で暮らすことになった。両親は、懐かしい道や家並みをどんな気持ちで見ているのだろうか。ちょうど町は秋祭りの最中で、お囃子はやしがにぎやかだった。おそらく、戦時中は祭りどころではなかったろうから、皆久しぶりに行われた祭りに浮かっていた。私たちは祭囃子のにぎやかさを避けて、祖父からもらった座卓を提げて裏道を歩いていた。座卓は古びていて足が三本しかなかったが、祖父は何よりもまず団らんの間を送ってくれたのだろう。親子五人は黙々と歩いた。小さかった私は歩くのがつらかったし、みんなが何もしゃべらずに歩いている雰囲気になえられず、遠くの家を指して「あの紅い花が咲いているところ？」と聞いた。百日紅の花が、秋空の青色に見事に映えていた。今でも百日紅の花が咲くと、あの道を出して胸がキュンとなる。

### 十四 戦後の暮らし

何はともあれ、家族が一緒に暮らすことができたのはとても幸せだった。一家五人が肩寄せ合って庭で野菜を作って、少しでも家計を楽にしようと努力する貧

乏生活が続いた。消息が分からなかった二人の兄のうち、長兄は親せきと一緒に引き揚げていることが分かった。次兄は日本を発つたときの記憶をたよりに、自分で我が家にとどり着いた。姉は玄関で呼んでいる人を見たとき、瞬時に次兄だと分かったと、いつもそのときの様子を話す。久々の明るいニュースに家族が喜び合ったのは言うまでもない。

しかし、景気が悪く町には失業者があふれ、引揚者の父も仕事が見つからなかったので、売り食いでしのごより仕方がなかった。満州から持ち帰った着物を風呂敷に包み、父に連れられて新宿の角筈へ売りに行った。少しでも高く買ってくれる店を探すために、角筈の露店街を何回往復したのか。良い値段で売れば、父は屋台で私たちが「コッテリ」と名付けたどんぶりに、山盛りのさつまいもを食べさせてくれた。コッテリはおいしい上に、父と二人だけの時間が持つことに満足していた。売る物が底をついてくると、父は質屋通いを始めた。タンスの前で、風呂敷を隠すようにして品物を包んでいる父の背中が、淋しそうで

あったのを覚えている。やがて父は、学生時代の友人 K 氏から借金をするようになった。返すあてもなく、どんどん額がかさんで行くので、断られることが多くなり、父と K 氏との仲もまずくなってきた。父は小学生の私に手紙を持たせて、K 氏宅に行くように言った。手紙を渡して玄関先で待っていると、K 氏はお金の入った封筒を渡してくれた。そして何回目だったか、K 氏は「今日でおしまいだよ」と言って、いつものようにお金の入った封筒を渡してくれた。私はこのお使いが借金であることをうすうす感じていたが、「おしまいだよ」と言われたことが悲しかったし、父が気の毒だと思った。

その後や々と仕事を見つけたが、職場での人間関係がうまくいかずやめてしまい、その後も職場を転々と変えていた。勤めが向かないと言って自分で事業を始めたが、父には事業の才覚もなかったのであろう、失敗を繰り返し母との言い争いは絶えなかった。父と争っている母もつらかったのであろう。母は、反物の行商をして家計を助けるようになった。回を重ねるに

つれて、母にも疲労がたまってきたようであった。い  
つだったか、疲れた顔で出掛ける母の顔を見て、母は  
このまま帰って来ないような気がして、泣きながら母  
にすがりついた。母は私を論したり、しかったり、す  
がりついた私を突き放したりしたが、私は絶対離れな  
かった。母はあきらめて、仕方なく私を連れて行商に  
でた。反物を持って屋敷町を歩く母の背中、タンヌ  
の前で風呂敷を広げていた父の背中と同じで淋しそう  
だった。

#### 十五 小学校と私立女子中学校

昭和二十一年の秋、区立の小学校の五年生に編入さ  
れた私は、多くの友達に恵まれて六年へ進んだ。疎開  
から返って来た子や、引揚者の子供など児童の数は増  
え続けた。児童が増えた分、教科書も不足したので、  
先生方は手づくりの教科書で授業を進めた。

私の担任のM先生は、合唱が好きで指導も上手だっ  
た。先生は毎朝教壇に立つと、先生専用の指揮棒、万  
年筆をさっと取り出していろんな歌を大きな声で歌わ  
せた。いろいろ教えていただいたが、二部合唱の「埴

生の宿」はハーモニーが美しく、今も私の心に深く刻  
まれている。この歌が原点になって、私は合唱の魅力  
にとりつかれ、今も地域の合唱団で歌っている。M先  
生は既に故人となられたが、クラス会では誰だった  
か、先生をしたので万年筆を振って、皆で「埴生の  
宿」を歌った。

姉たちは隣町にある私立女子校に編入した。食べる  
のもやっとだったのに、公立学校ではなく私立を選ん  
だのは、こんなときだからこそしっかりした女子教育  
をとの母の願いがあったからである。

昭和二十三年、小学校を卒業した私は、姉のいる私  
立女子校に入学した。月謝を払うために、三姉妹は神  
田でアルバイトをした。当時の社会情勢から、アルバ  
イトについて学校側もバイト先の会社も黙認してい  
た。みんな生きることに必死、そんな時代だったから  
である。私はこのほかにも中一、二の夏休みにはアイ  
スクリーム売りのアルバイトをした。二人一組であ  
る。上野駅前で大きな魔法瓶に入れたアイスクリーム  
を仕入れ、これを提げて東京駅近辺の事務所などを

回って売り歩いた。相棒は遊び半分でやっていたので、疲れたなどと言ってすぐ休みたがったが、私は学校の月謝や兄の入院見舞い、そしてポロポロになった運動靴も買ったかったので、喧嘩しながら売り歩いた。自分の足で稼いだお金には値打ちがあった。真つ黒に日焼けした私の顔は、嬉しそうに輝いていたのではないかと思う。大人も子供も生きるために苦勞を嫌がらず努力した。みんなハングリーだったから、生きるために真剣だった。そこから得たものには重みがあった。

#### 十六 平和とは

平成十二(二〇〇〇)年六月に歴史的な南北朝鮮の首脳会談が行われ、両者の接近が進展するのではないかと思われた。南北分断によって家族を別れ別れにされた人たちは、どんな思いでこの日を迎え、また交渉の進展を期待していることだろう。沖縄に基地がある限り、戦後は終わっていないと断言する人たちもいる。カンボジアでは、ばらまかれた対人地雷によって、無差別に殺されたり傷を受けている人たちが後を

絶たない。世界に本当の平和が訪れるのはいつなのだろう。戦後五十年が過ぎた今、戦争の悲惨さ、残虐さを知らない人たちに伝えて行くのが私たち世代の仕事だと思う。

今、日本人は豊かさと平和に慣れて、精神的にはぬるま湯にどっぷりと漬かっているのではないだろうか。物や情報があふれ、欲しければいつでもどこでも手に入るの、新しい物にばかり目が移り、古いものは簡単に捨ててしまう。心や物がともに満たされず、満たそうと努力している所に初めて心の優しさを感じ、ものの有り難さを感じる事ができるのにと思う。自分のためではなく、他人に対して自分に何ができるのかを考えることで、自分の心は育つのである。そして、心はすこしずつ光を持ち輝き始める。心の輝きは自分の宝物であるが、他人に分け与えられる宝物でもある。来るべき二十一世紀が、心豊かな平和な社会、世界になることを念じながら分かち合う優しさを持ちたいと思っている。